

通信



日仏東洋学会

1999年3月

東京・京都

第23号

日仏東洋学会

会 長： 興膳 宏

名誉会長： DE NAVACELLE, M.C.・山本達郎・ DELORMAS, Jérôme

顧問： 秋山光和・江上波夫・福井文雅・市古貞次・彌永昌吉

評議員： 竺沙雅章・ DURT, Hubert・濱田正美・羽田 正・池田 温・石沢良昭・

石井米雄・彌永信美・狩野直禎・加藤純章・菊池章太・興膳 宏・桑山正進・

京戸慈光・前田繁樹・松原秀一・御牧克己・森 由利亜・森安孝夫・明神 洋・

中谷英明・岡本さえ・大谷暢順・齋藤希史・坂出祥伸・高田時雄・田中文雅・

坪井善明・八木 徹・山田利明

代表幹事： 中谷英明

幹 事： 濱田正美・石沢良昭・前田繁樹・御牧克己・明神 洋・中谷英明・

齋藤希史・高田時雄・八木 徹

監 事： 加藤純章・岡本さえ

会計監事： 森 由利亜

推薦委員会：福井文雅・池田温・加藤純章・興膳 宏・御牧克己・山本達郎

本部

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部 興膳宏研究室

事務局

〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518
神戸学院大学人文学部 中谷英明研究室

入会・会費 (3000 円)

〒162 東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部 森 由利亜

通信編集担当

中谷英明・齋藤希史

表紙 題字 元・趙孟頫の六体千字文から
高田時雄氏集字
カット イラン陶器模様 (13世紀) から
桑山正進氏描画

日仏東洋学会 通信 第23号 1999年3月発行

CIRCULAIRE DE LA SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DES ÉTUDES ORIENTALES
n° 23 1999

目次

ある敦煌資料のこと——あいさつに代えて——	興膳 宏	1
藤枝晃先生の敦煌学	竺沙雅章	3
ポール・クローデル Paul Claudel と 二種類の〈中国詩〉翻案詩	門田真知子	6
Dix ans de développement des études sur la littérature chinoise en France (I)	François Martin	8
いまや10号に達した「極東アジア研究紀要」	ユベール・デュルト	18
1998-1999年度コレージュ・ド・フランス、高等研究院開講講座一覧		23
新刊紹介		
アンヌ・チェン著『中国思想史』	菊池章太	27
総会報告		29
会計報告		30
1998年度会員名簿		31

ある敦煌資料のこと —あいさつに代えて—

興膳 宏

私の所属する京都大学文学部では、建築中だった新棟が一九九七年夏に完成して、夏休みは研究室の引っ越しで大忙しだった。その騒動のさなか、ある学生が、「こんな物が見つかりました」といって、古ぼけてずっしりと重い平らなボール箱を持ってきた。中を改めると、十枚の古めかしいガラスの写真乾板が入っている。すかして見ると、どうやら中味は何かの古書の抄本らしい。それから、ためつすがめつ乾板をながめているうちに、「臣聞世之所遺、未爲非寶。…」といった、句頭が「臣聞…」で始まる短文が連続する文体の特徴から、その内容は三世紀晋の陸機の「演連珠」五十首（『文選』巻五十五）にちがいないと判断した。また各乾板の下部に「2493」という数字が見えるところから、恐らく敦煌写本であろうと推定し、調べてみると、果たして九枚がペリオ将来文献のうちの2493 無注本『文選』の陸機「演連珠」巻の残巻、のこりの一枚が同2500『礼記』残巻と判明した。さっそく焼き付けてみると、端正な楷書の文字が、卷子本の襞の陰影をも伴って鮮明に再現された。

いったい誰がこの乾板をもたらしたのだろう。その手がかりはすぐに得られた。箱の隅に挟まれていた紙片に見える“Ojima”という文字からすれば、これはかつて支那哲学史講座の教授であった小島祐馬先生（1881~1966）の所蔵されたものに違いない。小島先生といえば、フランス社会学を始めとするヨーロッパ人文社会科学の方法を摂取して、中国思想史研究に独自の学風を興した方

としてつとに著名である。小島先生がフランスに留学されたのは、一九二六年十月から二八年四月までだったから、この乾板もおそらくその時期に取得されたと想像できる。因みにいえば、小島先生は蔵書家・愛書家としても知られており、多数のフランス語文献を含むその膨大な蔵書は、いま高知大学の小島文庫に一括して保管されている。

その小島先生が、パリ滞在中にペリオ文献に関心を寄せられたのは、当然のことである。ペリオが敦煌から一連の文献をもたらしたのは一九〇八年であり、先生の滞仏のころには、ペリオ・コレクションの内容も、研究者の間でかなり広く知られるようになってきていた。小島先生はご自身が編集人の一人であった雑誌『支那学』の第五巻・四号から第八巻・一号（一九二九~三五）まで、九回にわたって、「巴黎国立図書館蔵敦煌遺書所見録」と題する主要所蔵文献の詳細な紹介を連載されたが、その中にくだんの『文選』残巻の名は見いだすことができない。あるいはいずれその紹介を予定しておられたのかも知れない。それが結局紹介される機会のないまま、先生はその写真乾板を、内容と最も縁の深い中国文学研究室に寄託されたのではないか、というのが私の推理である。念のため、高知大学附属図書館の『小島文庫目録』を検索してみたが、それらしい物は全く見あたらなかった。

日本の敦煌学が、狩野直喜、内藤湖南、羽田亨といった諸先学と、文献の将来者ペリオとの間の緊密な交流を通じて生まれ発展したことは、すでによく知られた事実である。し

かし、小島祐馬先生のような方がその間に果たされた貢献については、必ずしも十分に知られているとはいえないのではないか。実は、私自身、先生と敦煌学との深い関わりを、この小事によってはじめて認識した。「所見録」の序で、「同図書館敦煌遺書の主要なるものは、既に学界諸先輩によって殆んど世に紹介し尽されて居るが故に、余はこゝにたゞその零碎なる遺餘を拾摭するに過ぎない」と先生自身が述べておられるにもかかわらず、先生が当初意図しておられた敦煌資料の紹介は、発表されたものだけにとどまらない大きな構想だったのではないかと私には思える。

*

この文章は、福井文雅前会長の後を承けて、昨年四月に私が日仏東洋学会の会長に就任した挨拶のために書いている。この学会の特色は、その名称にもかかわらず、決して「日仏東洋学」という一つの学問分野が存在するわけではないことである。いろいろな専門領域に属する「東洋学」の研究者が、それぞれの領域におけるフランスの研究と何らかの縁を有することによって、一つの学会に結ばれているといえよかろうか。だから、会員の構成もおのずと多様である。その意味で、会員の関心を集約して何か一つのまとまった事業を学会として企画するのは、なかなかの難事である。

先に記した私の身近でのささやかなできごととは、フランスとの関わりがおそらくいろいろな身近な形で会員それぞれの周辺にもあるのではないかと、という一例として挙げたまでである。そのような些事に始まって、専門的な学術上の大きな事項に至るまで、おそらくさまざまな形でフランスとの縁を会員各位はお持ちであろう。その縁をお互いが大切に

しながら、この学会にそれらを結びつけることによって、会員相互のまたフランスの関係学会との交流をはかり、各自の関心のありかたに応じて学会を大いに利用していただければよいのではないかと。当初、会長を引き受けなければならなくなって、実はたいへん気が重かったが、こんなことを考えていると、少しは心が軽くなった。

最後に、福井前会長の長年の会運営のご努力に対して、心から敬意と感謝の意を表したい。

藤枝晃先生の敦煌学

竺沙雅章

藤枝晃先生は、1998年7月23日、呼吸不全のため逝去された。86歳であった。亡くなられる2週間ほど前、龍谷大学仏教文化研究所で研究会が行われていた時、病院の先生から電話がかかってきた。上山大峻氏への仕事上の用事であったが、用件が終わって私が電話に出ると、開口一番、「今日はなあ、若い実習生が爪を切ってくれたりして、すごく気分がええんや」であった。いつもと変わらぬ張りのある声だったので、もうすぐ退院されるのではないかと思われた。だから、訃報を受けた時には、一瞬信じられなかった。御遺族の話では、2、3日前に急に病状が悪化したとのことであった。それから既に7ヶ月たったが、研究会に出ていくと、今も先生がおられるような気がしてならない。

藤枝先生の思い出となると、どうしても、京都大学人文科学研究所の時から40年間続いてきた敦煌研究会のことになる。1952年、スタイン収集の敦煌文献がマイクロフィルム化されてわが国にもたらされた。その焼付写真が東洋文庫と人文研とに置かれて、1957年からその調査研究が双方で始められることになった。人文研には藤枝先生を班長とする敦煌研究班が組織され、京都側は仏典を主とするので、大谷大学、龍谷大学などから、院生を含む仏教学、仏教史の研究者も多く参加した。私も当時まだ院生であったが、それまでに那波利貞先生から敦煌文書の手ほどきを受け興味をもっていたので、願い出てメンバーに加えていただいた。

研究会は、毎週月曜日の午後、人文研東方面の会議室で開かれ、藤枝先生の周到な計画の下に調査が進められた。先ず、1点ごとの目録カードを手分けして作成し、それが終ると、般

若、法華、華嚴、涅槃などと仏典別に担当者が決められ、それぞれの経巻が『大正藏』のどこに当たるのかを調べて、該当箇所をカードに書き込む作業に移った。私に割り当てられたのは般若部經典であった。大般若經だけでも600巻、『大正藏』で3冊にもなる。そのなかから、1、2紙の断簡の該当箇所を探し出すのは、骨の折れることであった。半日かかって2、3点しか見付けられないことも珍しくなかった。東洋史の者が何でこんなことをしなければならぬのかと、疑問に思うこともあったが、そんな時、先生は「世界中で敦煌の般若經を全部見た者は君だけだ」と励まされた。研究というのは、人がやっていないことを地道に積み重ねていくのが大切なのだと教えられた。この時の経験は、私のその後の研究生生活に大きな教訓となった。

一通りの調査が終ると、今度は仏典ごとの解題を作り、それを順次研究会で検討した。手元にあるプリントによると、それは1959年7月から始まっている。解題には、仏典写本の遺存状態、書写の時代による経巻の変化、大正本とのテキストの比較などを記した。提出された解題の文章を、先生は1字1句きびしく添削され、時には書き直しを命じられることもあった。お蔭で、われわれは解題というものの作り方を学び、また仏典写本への興味を増すことになった。先生も率先して法華、華嚴など多くの解題を作って範を示された。プリントには、頭に「スタイン収集文献分類目録解題初稿」とあり、これは分類目録につける解題であった。しかし、ジャイルズ目録が出たこともあって、分類目録の計画は立ち消えになり、折角の仏典解題は日の

目を見なかった。これにはペリオ本、北京本が含まれておらず、不完全なものではあるが、敦煌写経の大体の傾向はこれによってうかがえるので、私は今も重宝にしている。

こうした研究会の調査方法について、先生の代筆である『東方学報』京都 35「敦煌研究」(1964) 序に、次のように記されている。

従来の研究者は、万卷の古写本の中から、自身の専門領域に属するものを数点または一断片だけを拾い出して宝物視するという扱い方であった。右の研究集団は夥しい写真の堆積を前にして、一点一点を論ずるより前に、一類一類の写本の概観を試みることから出発した。

先生は研究会で、仏典全体をまとめた「仏典概観」も発表されている。そのプリントには、1960年3月7日の日付がある。その文末にも、研究方針が述べられている。

われわれの目録並びに解題の方針としては、スタイン本を、全体として—乃至は敦煌本を全体として見て、そこに如何なる經典が、どれほど、どの様にして存するか、ということに眼目をおいた。

先生はいつも、従来の方法を「宝探し」「つまみ食い」方式ときびしく批判され、上記のような研究方針を最後まで貫かれた。なお、この「仏典概観」も活字にはならなかったが、敦煌写本の総論は、“The Tunhuang Manuscripts. A General Description” Part I, II. Zinbun 9, 10, 1966, 1970 に述べられている。

仏典写本の調査でむずかしかったのは、書写年代の判定であった。先生は写本を見て、「これは 540 年ごろ」などと即座に判定していかれるが、われわれには見当もつかず、はじめは先生に任せ切りであった。そのうち、書跡判定の「ものさし」となる「敦煌写経の字すがた」(『墨美』97)、「北朝写経の字すがた」(同 119)を作られた。研究会では、いつもこの 2 冊を傍らに

置いて書跡を比べつつ、われわれもだんだん年代判定の要領が分かるようになった。書写年代をめぐって、にぎやかに議論することもあった。

しかし、写本の研究は写真だけでは不充分である。是非とも、現物を見て紙質等を調べねばならない。1964 年以来、先生は毎年のようにヨーロッパに出張し、ロンドン、パリなどで敦煌写経の現物を調査された。まだ国交のなかった東ベルリンにも入り、アカデミー所蔵のル・コック収集トルファン写本を調査する道をつけられ、以後、班員が交代でベルリンに出向いて、写経の同定作業を行ってきた。こうして、先生の写本編年研究は、書跡のうえに紙質等が加わり、敦煌写本とトルファン写本とを会わせて、ますます精度を高めた。4C. から 10C. に及ぶ写本を A, A', B, C, D に区分し、それぞれの時期の写本特徴を明確にしていくという、編年研究は晩年まで続いた。

先生の研究は、写本の外形だけに止まらなかった。研究会では、はじめ夏安居と称して、夏休みに集中して『敦煌変文集』を写真と比べながら会談したこともあったが、1964 年ごろから、北朝期に書かれた仏典注釈書を悉く読んでいくことになった。その過程で、先生は驚くべき新事実を発見された。古泉円順氏と読んでおられた『勝義記』の文章が、聖徳太子の撰述とされてきた『勝経義疏』と近似し、後者も中国で撰述されて日本にもたらされたものであることが判明したのである。この説は、最終的には、『日本思想体系』2『聖徳太子集』(岩波書店、1975 年)に掲載され、学界に大きな衝撃を与えた。仏教学では今も反論が多いようだが、日本史の方では、最近、藤枝説を全面的に採り入れた研究が現れている(大山誠一『長屋王家木簡と金石文』吉川弘文館、1998 年)。ようやく、この説がひろく認められるようになったのは、喜ばしい限りである。

先生の定年退官後、研究会の場所は龍谷大学

仏教文化研究所に移り、責任者も井ノ口泰順氏
ついで上山大峻氏になったが、その活動は先生
が主宰され、やはり月曜の午後に行われてきた。
この時期の一番の仕事は、既に 1978 年に図版
篇が出ている『高昌残影—出口常順藏トルファン
出土仏典断片図録』（法藏館）の解説篇を完
成することであった。その大方の原稿は早くに
出来ていたのだが、その後、新しい事実が出て
きたり、考えが変わったりすると手を入れら
れ、完璧主義者の先生はなかなか手離そうと
されなかった。一昨年暮れになって、ようやく
出版するのを承知になり、現在、上山大峻氏を
中心にして、その出版の準備が行われていると
ころである。

先生が編年研究とともに力を入れてこられた
のは、敦煌写経の真贋問題であった。先生の鑑
定はきびしく、日本にある敦煌経の大部分は合
格しなかった。ところで、本物かにせ物かを万
人が納得するように説明するのはむずかしい。
その点で、先生も苦心されていた。研究会など
では、どこが疑わしいかを懇切に示して下さっ
たので、何とか理解することができた。先生の
写本に対する態度は、疑わしきは用いずという
ことであった。「膨大な本物があるのだから、
何も疑わしいものを史料に用いることはない」
と、よくいっておられた。晩年になって、スタ
イン本の後の部分にも、にせ物が混っているこ
とを突きとめられた。研究会の時、毎回マイク
ロリーダーの前に坐って、1点ずつ写本の真贋
を確かめておられた姿が、今も目に焼きつい
ている。その真贋をめぐる研究集会在、一昨年ロ
ンドンで開かれた。そのころ体調がすぐれてお
られなかったのが、われわれは極力引き留めた
のだが、自分がいかないと始まらない会議なの
だと聞かれず、医者付き添いで出発された。会
議では自説を披瀝して外国学者たちに感銘を与
え、見事に任務を果たされた。しかしその無理
がたたって、帰国後間もなく入院となった。私

はそのことを少しも知らなかった。10月にな
って、先生から入院しているとの電話をもらっ
た。早速、見舞いに行くと、「やっぱり1万メ
ートルを飛ぶのはこたえた」といわれた。だが、
それを悔やむ様子は全く見られなかった。まさ
しく、先生は敦煌写本の研究にその身を燃焼し
つくされたのである。

私は、40年間ずっと先生の教えを受けてき
て、思い出は数え切れないほどである。そのな
かで、ここでは研究会を通じてみた先生の敦煌
学を紹介した。論文などには現れない、先生の
学風的一端を分かっていたいただければ幸甚である。

ポール・クローデル Paul Claudel と二種類の〈中国詩〉翻案詩

門田 眞知子

フランスの詩人、劇作家で外交官でもあったポール・クローデル(1868-1955)は、若い頃、その外交官の駆け出しのころ中国に十五年滞在している。その間、彼は散文詩集『東方の認識』(1895-1905)や、『詩法』(1907)という難解なエッセイを醸した。前者は表意文字としての漢字の発見など、中国の風物に接してのクローデルの感興が描写的なタッチで綴られている。後者の『詩法』には、彼が中国赴任直後、ジェイムズ・レグの『老子道徳経』の英訳に接し、老子の空無の観念に感銘を得て、その影響の窺われるものである。

後年、クローデルは大正ロマン期の日本に 1921年から 1927 年始めまでフランス大使として滞在する。夏の中禅寺湖での『西洋表意文字』(1926)の言葉遊びや、日本を離れる直前の、百七十二句の短詩を自らの肉筆でカリグラフィーとした『百扇帖』(1926)を残す。クローデルにとってのハイクである。このスリムな形式と、表意文字の漢字の並びの詩の世界に彼が東洋文化の心髄を読み取ったことは彼の極東体験のユニークな結果であったと言える。

クローデルは 1935 年、外交官を退き、南仏のブランクの城に隠居する。実はその時期、クローデルは既に日本で試みた短詩形の『百扇帖』の言葉遊びの延長でもあるかのように、中国詩に改めて注目しているのである。

彼は〈フランス詩と極東〉と題した講演を 1937 年に行なう。そこでは唐詩の訳者としてデルベ＝サン＝ドゥニ(1822-1892)の名も挙げているが、ジュディット・ゴーチエ(1845-1917)の「素敵な、しかしほとんど知られていない」Le Livre de Jade を紹介しているのである。この講演においてクローデル自身がジュディットの訳詩の翻案詩を 10 首

紹介している。これが後にさらに 7 首追加されて <D'Autres Poèmes d'après le chinois> (他の中国詩) となるものである。

ジュディットの Le Livre de Jade に触れておくと、その初版は 1867 年に遡る。漢字名で『白玉詩書』なるタイトルも付されている。全体で 71 首の中国詩訳が収められている。杜甫の〈飲中八仙歌〉や李白の〈静夜思〉など、また蘇東坡の詩も見られる。これは 1902 年に改訂版が出る。この時タイトルは単に『玉書』となり、詩の数は大幅に増加し、全体で 110 首となった。以後、1908 年、1928 年など版を重ねる。クローデル所有の『玉書』は 1933 年の版である。改訂版に先立ち、ジュディットはヨーロッパで初めて宋代の女流詩人、李易安の 6 首の詩の訳を La Grande Revue 誌の 1901 年 12 月号に掲載している。それがそのまま翌年の改訂版に、〈恋人たち〉のカテゴリーの中に収められる。同じ場所には『詩経』の国風の〈載駟〉など、女性の側の恋愛詩を加える。勿論、〈女曰鷄鳴〉をジュディットは見過ごしてはいない。

クローデルの <D'Autres Poèmes d'après le chinois> 17 首の翻案詩は、明らかにジュディットの『玉書』から来ている。クローデルは上記の李白の有名な絶句、〈静夜思〉なども採り上げているが、諧謔的な二行の翻案詩に凝縮する。ただ出典の確認は容易であっても、『玉書』の中の訳詩と詩人名に若干、ミスもあり、そのまま信じる訳にはいかない。また〈他の中国詩〉と呼称されるにもかかわらず、こちらの翻案詩の方が時期的に早い。

さて、もう一方の <Petits Poèmes d'après le chinois> (中国小詩) (1939)のクローデルのフランス語訳は「Tsin Tsou ming による選集からのもの」としかクローデルは記さなかった。訳者名も「選

集」も長く謎のままであったが、実は <Tsin Tsou ming> は <Tsen Tsong-ming> であり、選集は *Rêve d'une nuit d'hiver--Cent quatrains des Thang* (1927) (或る冬の夜の夢：唐代絶句百首) であることはクローデル研究家のジルベール・ガドッフルが見いだした。しかし彼の調査はクローデルの若干の詩と選集の中に該当する仏訳詩とを並べてみただけで終了し、クローデルの〈中国小詩〉の中の3首の無名氏の詩は調査もせずに <Tsen Tsong-ming> の古詩集 (*Anciens poèmes chinois d'auteurs inconnus*) (1923) であると結論した。勿論すべて横文字での紹介である。

一方、件の仏訳選集は、その後長く見つからず、クローデル家にも残っていないことから原典との照合は出来なかった。しかし近年、筆者の調査でそれが曾仲鳴の『唐人絶句百首』であることが判明した。タイトルの如く絶句のフランス語訳である。筆者の調査のかぎりでは、絶句の選択を、彼は王漁洋(王士禛)の『唐人万首絶句選』に拠っている。これはある種の中国文学事典の曾仲鳴の項で紹介されているような『唐詩三百首』の仏訳などではない。また主タイトルの〈或る冬の夜の夢〉は、王漁洋の選集の一番目に置かれた王勃の〈寒夜思友三首之一〉のフランス語訳である。

曾仲鳴(1901-1939)は福州生まれでフランスに留学しパリ及びリヨン大学で法学、文学を学び学位も得ている。後に夫人となる方君璧女士もパリに同行したようである。曾仲鳴はその後、国立広東大学の教授にもなった。しかし蒋介石派に暗殺され、その生涯は短かった。曾仲鳴に関してはまた別の機会に論じたいと思うが、彼が絶句のみフランス語訳したことは意義ある出来事であったと言えるだろう。

上述のように、クローデルの〈中国小詩〉には未だ不明の無名氏の三つの詩があるが、これらはガドッフルの言った、曾仲鳴の『中国無名氏古詩選譚』からのものではない。この選集自体は『古詩十九首』のフランス語訳である。無名氏に関し

ては、クローデル研究家が分からぬものと等閑にしている、英語訳の詩との関連も探らねばならないと思われる。

以上、クローデルの〈中国詩〉には『東方の認識』以来の彼の〈原・中国〉のイメージが点在する。別離の歌や帰還の歌もあり、中国詩の特質を汲んだ選定をクローデルは行っている。限られた作品群ではあるが、それらの出自との関連においても、脳裏に永く一種の郷愁となって燻っていた中国の短詩形に肉薄しようとした試みと取することは可能であろう。



曾仲鳴遺像

方君璧作

曾仲鳴の遺像(夫人の方君璧女士による)
(京都大学人文科学研究所東洋学文献センター所蔵、「頤頤樓詩詞稿、方君璧」所収)

Dix ans de développement des études sur la littérature chinoise en France (I)

François Martin

Je voudrais présenter ici aux lecteurs sinologues japonais le travail accompli au cours de ces dix dernières années par leurs collègues français.

Il me faut commencer par expliciter le cadre choisi pour cet article. D'abord, bien que j'aie parlé dans mon titre d'«études», c'est-à-dire de «recherches», beaucoup des travaux que je présenterai ici se présentent en fait comme de simples traductions. Il est donc possible qu'on puisse contester l'emploi dans le titre du mot «recherches». Je voudrais faire ici une remarque à ce propos. Je ne sais pas quel est à ce sujet le sentiment de mes collègues japonais, mais dans le cadre d'une civilisation comme celle au Japon, où la familiarité avec la Chine est une réalité culturelle depuis les origines même de la fondation japonaise, où les études chinoises ont une tradition très ancienne et où, à l'époque moderne, la plupart des grands ouvrages chinois ont été traduits de nombreuses fois (ce qui a permis d'intégrer la connaissance de la littérature chinoise à ce que l'on pourrait appeler une «culture générale japonaise de base»), il est possible qu'une nouvelle traduction, par exemple, du *Sangokushi* ou du *Suikoden* ne puisse être considérée comme «ouvrages de recherche» mais plutôt, simplement, comme «objet de lecture».

Dans le contexte français, je crois que les choses sont un peu différentes. La curiosité à l'égard de la Chine, bien que relativement ancienne à l'échelle occidentale, reste malgré tout, dans l'absolu, toute récente et très lointaine. Il faut ici se rappeler que, alors que le lecteur japonais moyen connaît déjà de 2,000 caractères chinois, et que les sinologues japonais ont, avant même le début de leurs études spécialisées, la connaissance de beaucoup de caractères et une assez solide culture générale sur la Chine, les Français sont ignorants tout ou presque, et même les spécialistes commencent à dix-huit ou dix-neuf ans leurs études chinoises avec l'apprentissage des caractères 一, 二 et 三. La conscience de ce fait est quelque chose qu'il ne faut absolument pas négliger. Dans ce sens, toute traduction est déjà une «recherche», non pas seulement au sens scientifique, mais au sens général d'apprentissage, de recherche d'une culture à partir d'une autre. Pour que se développe à un niveau significatif la connaissance de la culture chinoise en France, il faut absolument que de plus en plus de jeunes esprits soient attirés très tôt vers la culture chinoise. Les traductions jouent évidemment dans ce sens un rôle essentiel (mais celui d'ouvrage de fiction, comme les fameux romans du juge Di par R. van Gulik, tous traduits en français, peuvent avoir aussi un effet très puissant, comme cela a été le cas pour l'auteur de ces pages). Par ailleurs, du fait que la langue chinoise est très lointaine, très différente de leur propre langue, c'est seulement dans des cas très rares que les sinologues français acquièrent une capacité de lecture leur permettant d'accéder en lecture directe à tous les domaines de la littérature chinoise. De ce fait, non seulement pour le grand public, mais aussi pour les spécialistes eux-mêmes, la traduction joue le rôle de base, absolument essentiel, dans la connaissance de la culture chinoise. D'ailleurs, très souvent sinon toujours, même les publications destinées au grand public sont accompagnées de riches introductions, qui sont parfois de véritables études, et d'un appareil critique (notes, commentaires), qui les rendent véritablement dignes d'être qualifiées de travaux scientifiques.

Pour cette raison, je considérerai ici que, dans le contexte français, une bonne traduction est déjà une recherche, et ne passerai sous silence que de mauvaises traductions, des versions abrégées ou adaptées d'œuvres chinoises, qui sont nombreuses aussi, mais qui, au lieu de contribuer, ou alors très peu, à la connaissance de la littérature chinoise, et qui sont même, dans certains cas, susceptibles de la fausser.

Par ailleurs, si je me limite ici aux dix dernières années, c'est parce qu'il m'est impossible de faire un historique complet des études françaises sur la littérature chinoise, et que, en fait, ces dix années ont vu un développement considérable sans précédent, de ces études. D'ailleurs, je ne prendrai pas <dix années> (le nombre des 十天干) comme une limite trop stricte; ce pourrait aussi bien <douze années> (le nombre des 十二地支). D'une manière générale, c'est depuis le milieu des années 1980 que la production sinologique française en matière de la littérature a pris son nouvel essor. Cet essor permet à la sinologie française d'acquiescer, ou plutôt de conserver le rang de troisième <sinologie non-chinoise>, après la sinologie japonaise et la sinologie anglo-saxonne, mais peut-être la sinologie coréenne, en plein développement elle aussi, pourrait lui contester ce titre. En tous cas, au niveau européen, et cette fois sans contestation possible (la sinologie anglaise étant ici prise indépendamment de la sinologie américaine), et bien que la sinologie allemande connaisse aussi un développement spectaculaire, et que la sinologie russe ait une tradition très riche mais pratiquement inconnue à l'étranger, la sinologie française classe certainement au premier rang.

J'espère de tout coeur que mes lecteurs ne prendront pas ce préambule comme la manifestation d'un nationalisme, voire d'un chauvinisme étroit; mais ces considérations me semblent utiles pour placer la sinologie française dans une perspective historique, qui permettra dans une large mesure de comprendre et d'apprécier de manière globale le niveau de connaissance atteint par les savants, mais aussi par le grand public français, sur la littérature chinoise. Or, à ce point de vue, la France me semble pouvoir revendiquer un statut quelque peu particulier.

Comme faits qui me semblent particulièrement représentatifs de l'intérêt que portent les Français à la littérature chinoise, je voudrais citer les deux suivants: d'une part, le fait que beaucoup de traductions d'oeuvres chinoises paraissent dans des collections assez prestigieuses, dont la plus prestigieuse de toutes, *La pléiade* (Gallimard), longtemps réservée à la littérature française, et aux littératures culturellement voisines dans le temps ou dans l'espace, mais qui s'est peu à peu ouverte aux littératures étrangères, et de ce fait se trouvent aisément dans les librairies, même des très petites villes de province; or les volumes de *la Pléiade* sont souvent achetés, même si c'est parfois c'est parfois en raison d'un snobisme un peu <petit bourgeois>, presque systématiquement par beaucoup de gens appartenant à ce qu'on peut appeler <le grand public cultivé>. D'autre part, la traduction d'une oeuvre littéraire chinoise de quelque importance est presque toujours saluée un peu comme un événement littéraire, donnant prétexte à de nombreux articles de presse, débats à la télévision, interviews des auteurs, émissions de radio, etc. En bref, il me semble, mais peut-être y a-t-il là une part de subjectivité, que la réception de la littérature chinoise dans le public français se fait à un niveau qui n'est pas atteint dans les autres pays occidentaux.

Bien que ces faits soient bien connus des lecteurs japonais, j'aimerais rappeler ici que cette sympathie du public français pour la littérature chinoise repose sur des bases culturelles et historiques relativement anciennes. Elles remontent en fait essentiellement au 18^e siècle. De cette époque, à laquelle la tradition historique française donne le nom de <siècle des lumières>, parce qu'elle a donné le jour à une réflexion philosophique sur la nature du pouvoir et a préparé l'avènement de la démocratie date un très grand intérêt pour la Chine: on en trouve le témoignage dans la décoration, le mobilier des châteaux, l'art des jardins (constructions de pavillons inspirés de la Chine, etc.), l'évolution de la céramique dans ses techniques et ses décors, en bref tout ce qu'on appelle en général <les chinoiseries> et qui peut être qualifié de <chinoiseries> d'une manière un peu péjorative, en d'autres termes une manifestation particulière du goût de <l'exotisme> (bien que j'y voie personnellement les symptômes d'un curiosité digne de ce qu'on appelle en France <l'honnête homme>, c'est-à-

dire l'homme désireux d'appréhender tous les aspects du savoir dans sa propre culture, mais aussi de saisir dans la culture des autres, à travers les continents et les époques, ce qu'il ne connaît pas encore mais lui paraît, en tant que manifestation du génie humain, digne d'être connu). Mais à un niveau plus profond, et porteur de conséquences culturelles beaucoup plus grandes, ce fut aussi une époque où la découverte de la culture chinoise influença de manière très nette la réflexion politique et philosophique.

C'est en effet précisément pendant le siècle des lumières, sous les empereurs Kanxi, Yongzheng et Qianlong, que l'Occident découvrit vraiment la Chine: c'est par exemple en 1733 qu'un jésuite français, le Père Lacharme, fit la première traduction du *Shijing*, en latin. Mais cette découverte se fit essentiellement par l'intermédiaire des jésuites, les seules personnes qui avaient à la fois la possibilité de long séjour en Chine et le niveau culturel nécessaire à l'observation intelligente de la culture chinoise. On peut donc dire que, d'une certaine manière, ils ont eu, en matière culturelle une sorte de <monopole de la Chine>. Mais la description qu'ils firent de la société et du gouvernement chinois, pour diverses raisons, parmi lesquelles les raisons politiques viennent au premier plan, manquait un peu d'objectivité: ils montrèrent le mandarinat, basé sur les examens officiels, comme un système parfait, puisqu'il assurait la promotion des élites du pays. Ainsi donc, comme peinture de société idéale, la Chine, chantée, sur la foi des descriptions des jésuites, par des grands esprits comme Leibnitz en Allemagne et Voltaire en France, rejoignit la liste des modèles <utopiques>, très à la mode de cette époque, comme arme destinée à saper les fondements de la monarchie française. Or l'image de la Chine présentait une force particulière puisque, à la différence des autres utopies, elle correspondait à un pays réel.

En fait, l'image <jésuite> de la Chine joua un rôle considérable sur la naissance des sociétés occidentales modernes, puisque c'est indirectement, sinon sur le modèle, du moins sur le principe chinois, que les examens, si étrangers à la mentalité aristocratique européenne, furent adoptés en Europe, à partir de Napoléon, comme système de recrutement des fonctionnaires, et plus généralement comme système d'évaluation des capacités individuelles. En définitive, la bureaucratie chinoise a joué un rôle indirect mais très important sur la naissance et le développement de la bureaucratie française.

Il est frappant que, depuis le 18^e siècle, et sans rupture, la Chine est restée une image idéale, assez coupée de la réalité. On a souvent l'impression que pour les intellectuels français, tout ce qui se passe en Chine est bien. La Révolution culturelle a été jugée dans son ensemble très positivement, simplement sur la foi de quelques témoignages partiels (comme à l'époque des Jésuites), et a à son tour préparé les événements de 1968, qui devaient avoir aussi un retentissement à l'échelle mondiale sur l'évolution des mentalités et des sociétés contemporaines.

Je me suis livré ici à un développement assez long, mais je crois qu'il est utile pour comprendre l'attitude des Français vis-à-vis de la culture chinoise, attitude que l'on peut qualifier de curiosité, de sympathie de principe, et même, compte tenu de ses aspects excessifs, de fascination.

Je voudrais encore rappeler qu'un autre phénomène marquant du 18^e siècle, est le triomphe du roman comme genre littéraire. Ce n'est pas sans rapport avec le mouvement intellectuel du siècle des lumières: le roman sera d'abord un moyen d'opposition à la monarchie (en tant que cadre des <utopies>, il rejoindra l'image jésuite de la Chine), et il devait devenir l'expression littéraire essentielle de la bourgeoisie montante. Autrement dit, en même temps que le 18^e siècle marquait la naissance d'une conscience politique moderne, il marquait aussi la naissance d'une conscience littéraire moderne. Alors que dans d'autres pays d'Europe, comme l'Allemagne ou la Russie, la poésie a la faveur d'un vaste public, en France, le roman règne pour ainsi dire sans partage.

La <sympathie de principe> des lecteurs occidentaux pour la Chine, en même temps que leur préférence pour le roman, sont deux phénomènes qui se conjuguent pour assurer au roman chinois un public

large et réceptif. On est frappé de voir que les produits de la <littérature des cicatrices> 痕跡文學 et de la littérature sentimentale, qui, s'ils étaient écrits par des auteurs français, seraient très certainement rejetés par la critique, en raison de leur niveau littéraire en général très bas et de leur naïveté, sont accueillis avec faveur en raison de leurs origines chinoises. Quant aux romans classiques (quand je parle de <roman> ici, je veux dire <long roman> et <nouvelle>, c'est-à-dire la prose narrative des Ming et des Qing), (bien que la poésie ait aussi un statut particulier et un peu différent, j'en parlerai plus loin) il est assez faiblement perçu par beaucoup comme la première, et presque la seule, expression littéraire de la Chine.

Puisqu'elle occupe dans le goût du public, mais aussi dans le travail des chercheurs (qui reflète en fait ce goût) une place prépondérante, c'est par la littérature narrative des Ming et des Qing que je vais commencer mon survol des études de littérature chinoise en France.

I Romans et contes des Ming et des Qing

Sur le plan des grands romans chinois, tout d'abord, les 15 dernières années ont marqué un développement spectaculaire: une simple liste chronologique permet de s'en rendre compte:

1979: publication dans *La Pléiade* de la traduction intégrale du 水滸傳, <Au bord de l'eau> (2,600p.), par Jacques Dars. Cette traduction, d'une qualité tout-à-fait remarquable, a été saluée à l'époque par la presse écrite ainsi que la radio et la télévision comme un événement littéraire de premier plan, ce qui a beaucoup encouragé les traducteurs à travailler sur les grandes oeuvres romanesques chinoises. Le succès de cette traduction lui a valu en 1997 d'être réédité dans une collection de poche (Folio, Gallimard), ce qui est une <première> pour les grands romans chinois.

1981: publication dans *La pléiade* de la traduction intégrale du 紅樓夢, <Le rêve dans le pavillon rouge> (plus de 3,200p.), par Li Zhihua 李治華 et J. Alézais.

1985: publication dans *La Pléiade* de la traduction intégrale du 金瓶梅, <Fleurs en fiole d'or> (2,700p.), par André Lévy.

1986: publication chez Gallimard (*Connaissance de l'orient*) du 儒林外史; <Chronique indiscreète des mandarins> par Tchang Fou-joëui.

La même année, publication du 7e et dernier volume de la traduction intégrale du 三國志演義, <Les trois royaumes> (Flammarion). Le premier en avait été publié en 1960, à Saïgon, par Ngiêm Toan et Louis Ricaud. Les mêmes traducteurs ont publié trois autres volumes. Leur travail a été poursuivi et mené à bien par Jean et Angélique Lévi.

1991: publication, à *La Pléiade*, de la traduction complète du 西遊記, <La pérégrination vers l'Ouest>, par André Lévy.

Si l'on veut faire une synthèse, on s'aperçoit que, alors qu'avant 1979, les <grands romans chinois>, appartenant au domaine de ce qu'on appelle en France les <romans-fleuve>, n'étaient connus que par des extraits, des traductions incomplètes ou des adaptations libres et de peu de valeur scientifique, de 1979 à 1991, c'est-à-dire en moins de dix ans, la plupart d'entre eux, et en particulier les 四大奇書 ont été traduits par des savants d'excellent niveau. Peu des grands ouvrages restent maintenant à traduire. L'un d'eux, le 封神演義, est actuellement en cours de traduction.

Ce bilan très positif est un encouragement à la découverte d'oeuvres moins connues: Isabelle Bijon a

traduit 孽海花 <Fleur sur l'océan des pêchés> (T.E.R, 1983); Jacques Pimpaneau a publié en 1985 la traduction de 東周列國志 <Royaume en proie à la perdition> (Flammarion); Nadine Perront en 1993 celle de la 東遊記 <Pérégrination vers l'Est> (Gallimard), qui est le parallèle taoïste du 西遊記.

J'en oublie certainement d'autres.

Non seulement les sinologues ont été encouragés à pousser plus loin la découverte du roman chinois, mais ils ont même commencé à faire connaître au public français la tradition du commentaire sur le roman: c'est ainsi que Chan Hing-ho a publié en 1982 (IHEC) <Le *Honglouloumeng* et les commentaires de Zhi Yanzhai>.

Enfin, bien qu'il ne s'agisse pas d'une oeuvre ancienne, mais c'est quand même d'une certaine manière un classique de la littérature chinoise, Charles Bisotto a publié une traduction de la 中國小說史略 <Brève histoire du roman chinois> de Lu Xun (Gallimard, 1993).

Pour des raisons éditoriales, les contes étant plus facile à éditer que les romans, il y a longtemps que les lecteurs français disposent de sélections plus ou moins riches. Il y a longtemps que l'on dispose en français de choix de contes par Feng Menglang et Ling Mengchu, ainsi que de contes tirés du *Liaozhai zhiyi*, etc. Ces traductions sont le plus souvent, il est vrai, de qualité inégale. Néanmoins, sur ce plan aussi, comme c'était le cas pour les romans, les dernières années ont été le théâtre de développements dignes d'être notés.

Outre la publication, au cours de ces dernières années, de plusieurs nouveaux recueils de contes, tirés surtout, toujours, des recueils de Feng Menglong et Ling Mengchu. Mais récemment, le public français s'est vu présenter la traduction intégrale de plusieurs recueils de *huaben*, moins célèbres, mais d'une grande importance historique.

C'est ainsi qu'en 1987, Jacques Dars a publié la traduction intégrale du 清平山堂話本 (*Contes de la montagne sereine*, Gallimard), du 16^e siècle, recueil de *huaben* qui est le plus ancien de tous. Comme pour faire réponse à cet ouvrage, Rainier Lanselle a publié en 1991, sous le titre *Le cheval de jade* (Picquier) la traduction complète du 照世杯, un recueil de *huaben* qui appartient, quant à lui, à la phase tardive, et même terminale, de ce genre. L'auteur inconnu, qui se cache sous le pseudonyme de 酌元亭主人, qui semble avoir été en rapport étroit avec le célèbre Li Yu, fait preuve de grandes qualités innovatrices. Les nouvelles sont assez longues pour être qualifiées de petits romans, et elles témoignent d'une puissante veine satyrique, comme dans le premier conte, 七松園弄假成真, qui est une parodie du thème à succès des <belles femmes et brillants lettrés> (美人才子). Le troisième conte, 走安南玉馬換驛絨, est particulièrement intéressant pour le public français, puisque le Vietnam y est présenté un peu comme un pays d'utopie, qui rappelle par bien des côtés la Perse de Montesquieu. La principale caractéristique de l'auteur de ce recueil est, comme le dit le sinologue américain Patrick Hanan, de "démenteler le cadre formel et moral du conte traditionnel." Ces deux recueils historiquement très importants, sinon très étendus, publiés à seulement quatre années d'intervalle, présentent en quelque sorte l'origine et l'aboutissement du *huaben*.

Or, récemment, Rainier Lanselle a présenté au public français la première traduction intégrale d'un grand recueil de contes de l'âge d'or de ce genre, le 今古奇觀 (<Spectacles curieux d'hier et d'aujourd'hui>, Gallimard, *La Pléiade*, 1996). La publication de ce très important ouvrage de plus de 2,000 pages a été salué par les médias comme un événement littéraire significatif. C'est en effet un ouvrage qui a de très nombreux mérites, non seulement parce qu'il est écrit dans une langue française très pure et d'une qualité remarquable, directement héritée de la prose des grands maîtres français du 17^e siècle, mais aussi parce qu'il s'accompagne d'un très riche ensemble de notes de fin d'ouvrages, dont certaines sont de véritables notices, par

exemple sur le mariage, l'administration, la piété filiale, le système monétaire, etc., qui constituent une introduction remarquable à la civilisation chinoise.

Mais cet ouvrage a aussi un très grand mérite en tant qu'ouvrage de recherches. En général, de nos jours, le *Jingu qiguan* est assez peu apprécié, et on lit fréquemment ce genre de jugement: " Les collections d'origine (de Feng Menglong et Ling Mengchu) étant maintenant disponibles dans de bonnes éditions, le 今古奇觀 n'a plus beaucoup de valeur." Cette appréciation vient bien sûr de l'idée que le 今古奇觀 est une simple anthologie faite à partir des recueils de Feng Menglong et Ling Mengchu. Mais Rainier Lanselle nous montre que cet ouvrage est beaucoup plus original qu'il n'y paraît. L'auteur n'a pas seulement choisi quarante contes, mais il les a aussi réorganisés suivant une construction très savante. Cette construction se révèle par des détails ingénieux. Pour en prendre un exemple concret, deux des contes du 醒世恒言 de 馮夢龍 (*Jingu qiguan* 35 et 36) portent le titre original de 徐老僕義憤成家 et 蔡瑞紅忍辱報仇 ; or dans le *Jingu qiguan* , le titre du second devient 蔡小姐忍辱報仇. Les deux caractères 小姐 sont donc venus remplacer 瑞紅. Ce jeu de parallélisme est trop évident pour ne pas cacher quelque chose. En effet l'auteur nous montre que les deux contes s'éclaircissent mutuellement. Dans le *Hengyan* , il est vrai que ces deux contes se suivaient déjà: le jeu sur les caractères n'est donc qu'un signal. Mais ailleurs, le Maître qui embrasse la jarre 抱甕主人, comme se désigne lui-même le compilateur du *Jingu qiguan* , inverse deux contes, ou juxtapose deux contes qui ne se suivaient pas à l'origine, ou même qui étaient originaires de deux recueils différents. Ces jeux de construction invitent le lecteur à une lecture nouvelle, souvent plus philosophique, qui le conduisent progressivement à découvrir les grandes forces qui gouvernent le monde et à remettre en question les idées reçues: dans le *Jingu qiguan* , Lu Nan 蘆楠, modèle admiré du lettré intègre, qui ne fait pas de concessions, devient, à la lumière du conte précédent, le contre-exemple même du lettré, le *xizoren* qui commet la faute très grave de ne pas savoir choisir ses amis et qui s'obstine dans l'erreur. On a donc affaire dans le *Jingu qiguan* à une construction très savante.

Or, non seulement, Rainier Lanselle fournit des annotations très riches, mais en plus, il donne pour chaque conte une longue notice explicative qui permet d'en apprécier tout le sens et éclaire ses rapports avec le conte précédent ou suivant. Par cette recherche extrêmement fine, il sort le *Jingu qiguan* des oubliettes et montre qu'il ne s'agit pas d'un simple choix secondaire, mais d'une oeuvre très originale, marquant en quelque sorte un point d'aboutissement de l'art du conte, qui ne pouvait être que l'oeuvre d'un lettré d'une culture immense et d'une intelligence très vive. Cette traduction est donc une contribution très positive à l'histoire de la littérature chinoise.

Une étude comme celle de Rainier Lanselle sur le *Jingu qiguan* nous rappelle, comme le dit l'auteur lui-même, que " l'anthologie est en Chine un des modes dominants de la stratégie du discours " et que " les choses ne prennent leur sens plein que selon le contexte." C'est une bonne leçon pour les traducteurs, puisq'on s'aperçoit ainsi qu'il est dangereux de ne traduire que des sélections d'une oeuvre, au risque de perdre une grande partie de la richesse de l'original.

Cette tendance à la traduction intégrale est suivie, comme on l'a déjà constaté, par des traducteurs de plus en plus nombreux. Pour en terminer avec notre brève étude du conte, c'est ainsi qu'André Lévy a publié, en 1996, le premier volume de la première traduction intégrale en Occident du, pour lequel on n'avait jusqu'ici en France que des sélections plus ou moins riches dans des traductions en général sans grande valeur.

II Le nouvelle et le roman érotique

Revenons encore une fois au 18e siècle français. Ce fut, comme on l'a dit, l'âge d'or du roman

philosophique et politique, destiné à saper le pouvoir monarchique. Ce fut aussi, il faut le rappeler, l'âge d'or du roman érotique. Cette coïncidence n'est pas un hasard. Les mêmes auteurs ont souvent écrit dans les deux genres, comme Diderot. D'ailleurs, l'érotisme est souvent vu comme un arme pour lutter contre la morale et le pouvoir politique et religieux contre lesquels les esprits libéraux étaient entrés en lutte. Un exemple extrême en est l'oeuvre du Marquis de Sade. La France est, de toutes façons, bien connue comme le <pays de l'amour>, et la littérature érotique, de la poésie au roman, n'y est nullement méprisée et a produit bien des chefs-d'oeuvre.

La littérature amoureuse chinoise, qu'il s'agisse de poésie ou de prose, est restée longtemps inconnue du public français: en 1713, Montesquieu, à l'issue de ses conversations avec Arcade Hoange, Chinois qui vint et mourut en France sous Louis XIV, se désolait que " il n'y a pas plus de rapports entre les hommes et les femmes que s'ils vivaient sur des mondes différents".

En fait, le prude catholique qu'était Arcade Hoange était un mauvais informateur. C'est donc avec le plus grand intérêt que les lecteurs français ont découvert il y a déjà longtemps le 肉蒲团 de 李漁 (traduit en 1960 par Jacques Pimpaneau, en collaboration avec le romancier Pierre Klossowski), dans une très belle édition qui a trouvé sa place dans de très nombreuses bibliothèques, puis en 1985, le 金瓶梅 (déjà mentionné).

Or, ces dernières années, en l'espace d'une dizaine d'années, un si grand nombre de romans et nouvelles érotiques chinois ont été traduits que le catalogue de la célèbre librairie sinologique parisienne <le Phénix> a du prévoir dans son catalogue, à côté des <Romans> et des <Contes>, une section spéciale, <La chambre jaune>. Il s'est constitué ainsi une véritable <bibliothèque érotique chinoise> dont le grand intérêt est de faire connaître des textes qui sont souvent bien difficiles à trouver en Chine même. On citera, dans l'ordre chronologique de parution:

En 1987, traduction par Rainier Lanselle, sous le titre <Le poisson d'argent et l'épingle au phénix>, de douze contes tiré de six collections du 17e siècle, 拍案驚奇, 歡喜冤家, 一片情, le 無声戲 de 李漁, etc.

En 1990, traduction par Martin Maurey, sous le titre <Du rouge au gynécée>, de 玉闌紅 (Picquier).

En 1994, traduction du 株林野史, des Ming, par Christine Barbier-Kontler, sous le titre <Belle de candeur> (Picquier); traduction de deux romans Ming, 痴婆子伝 et 如意君伝, par Huang San et Lionel Epstein, sous le titre <Vie d'une amoureuse> (Picquier).

En 1995, outre une nouvelle traduction du 肉蒲团 par Christine Corniot (<De la chair à l'extase , Picquier>), traduction par Huang San et Oreste Rosenthal, sous le titre de <Les écarts du prince Hailing> 海陵逸史, de l'époque Ming; et, par Christine Barbier-Kontler, de 昭陽趣史, sous le titre <Nuages et pluie au palais des Han> (Picquier).

En 1996, publication d'une traduction complète du recueil de nouvelles Ming 一片情 (<Tout pour l'amour>), par André Lévy (Picquier).

En 1997, par le même traducteur, <Epingle de femme sous le bonnet viril> (Mercure de France), nouvelle tiré du recueil 弁而釵, sur les amours homosexuelles entre jeunes lettrés.

En 1998, par le même traducteur, sous le titre <Amour et rancune-- Les spectacles curieux du plaisir> (Picquier), traduction intégrale du recueil Ming 歡喜冤家.

Ce catalogue peut sembler un peu trop fastidieux, mais j'ai tenu à en donner (presque) tous les titres pour bien faire apprécier le fait que l'on dispose maintenant en français d'une <bibliothèque érotique chinoise> d'une variété et d'une qualité inégalées dans les autres pays occidentaux. Certes, on peut voir dans cette vogue, qui est d'ailleurs essentiellement le fait d'un éditeur, Picquier, l'exploitation parfois facile d'un goût très français pour les chose du sexe, mais cette exploration d'un domaine assez mal connu de la littérature chinoise est

quelque chose d'assez original pour être mentionné.

Bien que je sorte un peu ici de la sinologie, j'ajouterai que même des romanciers français, non sinologues, se sont récemment inspirés de ces oeuvres pour écrire des romans érotiques se situant dans la Chine ancienne. Parmi eux, Irène Frain, femme d'une grande beauté et d'un grand talent, et qui est une figures scandaleuses du monde littéraire français, en a écrit un qui, exception faite de ses qualités de style, ne relève que de ce qu'on pourrait appeler une <pornographie> exotique. Mais cela est quand même révélateur de l'impact que peuvent avoir les études chinoises sur le public, et même sur les auteurs, français.

C'est aussi peut-être, révélateur des multiples possibilités de malentendus que peut receler la découverte d'une littérature étrangère. Ainsi, à cause du grand nombre de textes érotiques chinois traduits, le public français a maintenant tendance à s'imaginer qu'il s'agit d'une source d'inspiration fondamentale en Chine alors que, comme on le sait bien ces ouvrages n'étaient voués qu'à une circulation très restreinte.

Du fait même que de tels malentendus sont très faciles à commettre, des <guides de lecture> sont indispensables, car la similitude des genres cache en fait des divergences très profondes: les lecteurs français sont souvent surpris, et même déçus, de ne pas trouver dans le roman chinois ce qu'ils s'attendent à y trouver; à l'inverse, ils trouvent dans le roman chinois des choses qu'ils ont du mal à comprendre. Quant aux traducteurs, ils ont peut-être trop tendance à favoriser des oeuvres qui flattent le goût français.

III Etudes sur le roman et la nouvelle

Un ouvrage comme celui de Rainier Lanselle, cité plus haut, est un bon guide, qui permet de comprendre le <projet moral> qui anime souvent les auteurs ou les anthologistes. Un autre guide précieux est une importante étude de Jean Lévi, *La Chine romanesque-fictions d'Orient et d'Occident* (Seuil, 1995), qui est lui-même, en plus d'un sinologue, un romancier apprécié, auteur de plusieurs ouvrages romanesques sur la Chine ancienne, dont une vie romancée de Qin Shi huandi.

Ce vaste ouvrage, muni d'un précieux index, n'est pas une étude historique ni thématique du roman et du conte chinois, mais une réflexion comparatiste en profondeur. Il comporte 4 parties, qui peuvent en fait être lues comme des essais séparés: Roman, parole et écriture dans les traditions occidentale et chinoise; Histoire et Roman; Amour et Romanesque en Chine. Cette dernière partie est, à mon sens, la plus intéressante, car les conceptions de l'amour en Occident et en Extrême-Orient sont extrêmement différentes. Alors qu'en Occident la femme aimée est vue comme pure lumière, comme déesse, elle est plutôt en Extrême-Orient une <créante de l'ombre>. Les lecteurs français ont été à ce sujet très étonnés par la découverte d'un ouvrage comme *L'éloge de l'ombre* de Tanizaki Jun'ichirō.

L'ouvrage de Jean Lévi est sans doute destiné au grand public cultivé plus qu'aux sinologues. Ces derniers auront sans doute été intéressés par la publication de très vaste *Inventaire analytique et critique du conte chinois en langue vulgaire* (titre chinois: 話本総目提要), publié sous la direction d'André Lévy, entreprise commencée en 1978 et dont le 5e volume, entièrement dû à Rainier Lanselle, va bientôt paraître. Ils s'agit d'un catalogue systématique des huaben, où tous les contes sont successivement répertoriés, résumés, et analysés, en relevant pour chacun tous les thèmes et éléments originaux.

On voit donc qu'un très grand nombre des textes de prose narrative des Ming et des Qing ont été traduits en français, ou au moins présentés. Et surtout, alors que jusqu'à il y a une dizaine d'années, on ne dispose que d'extraits ou d'adaptations, la tendance est maintenant à la traduction complète des oeuvres ou des recueils d'oeuvres. Un travail de base considérable a donc été accompli, ce qui permettra sans doute aux chercheurs de se consacrer la recherche.

Outre ces traductions, un certain nombre d'articles portant sur des points précis d'histoire du roman ou du conte ont été publiés dans les revues spécialisées, mais je n'en donnerai pas le détail ici.

IV Autres genres en prose sous les Ming et les Qing

Si on ajoute aux ouvrages cités ceux parus précédemment, on voit donc que le domaine de la prose narrative est maintenant bien exploré dans ses grandes lignes. Mais c'est dans le fond, un nouveau développement de quelque chose qui existait déjà.

Aussi, quelque chose de peut-être plus représentatif de l'élargissement des études françaises en littérature chinoise, en fin de compte, est, au cours de ces dernières années de l'exploration, peut-être moins spectaculaire, mais quand même assez avancée, de ces produits typiques du littéraire chinois que sont les ouvrages du type des 筆記, 日記, 小品, recueils de 清言, etc., qui sont pour la plupart des chefs-d'œuvre de la fin des Ming et du début des Qing, avec lesquels les lecteurs français étaient moins familiers, quoiqu'il ne s'agisse nullement de genres inconnus en Occident.

Le plus ancien, peut-être, des ouvrages de cette catégorie à avoir été connu en France est le 浮世六記 de 沈復, traduit en 1967 par Pierre Ryckmans (*Six récits au fil inconstant des jours*, Gallimard). Cet ouvrage a été fort apprécié: c'est sans doute un autre aspect du goût pour l'amour des Français, qui apprécient non seulement les ouvrages érotiques mais aussi les histoires du pur amour, dans la tradition des troubadours du Moyen-âge.

Mais depuis cette traduction, ce genre, ou cet ensemble de genres restait dans l'ombre, jusque ce qu'en 1982 Martine-Vallette Hérmey publie une riche étude sur 袁宏道 (Collège de France, Institut des Hautes études chinoises): *Yuan Hongdao, théorie et pratique littéraires*, où elle traite de manière complète des problèmes relatifs à littérature à la fin des Ming: tradition et renouvellement des genres, rapports de la littérature et de l'individu (autour de la théorie du 性靈).

Dès la même année, le même auteur a publié, sous le titre *Nuages et pierres*, une importante collection de notes de voyage et autres textes en prose de Yuan Hongdao. Elle s'est ensuite attachée depuis connaître d'autres auteurs de la même période. On lui doit aussi (Picquier, 1992), sous le titre de *La dame aux pruniers ombreux* 影梅庵憶語 de 冒襄 (1611-1693), court ouvrage d'une élégance extrême, dans lequel on peut voir précurseur du 浮世六記, et le fameux 菜根譚 de Hong Zicheng (16e siècle) (*Propos sur la racine des légumes*) et le 游夢影 de Zhang Chao (*L'ombre d'un rêve*, Zukma, 1997). On lui doit aussi, sous le titre *Les formes du vent* (Le nyctalope), une collection de notes de voyage et descriptions de paysages qui sont pour l'essentiel l'œuvre d'auteurs des Ming et Qing, quoique quelques uns remontent aux périodes précédentes, à partir des Six Dynasties.

D'autres auteurs ont travaillé sur des ouvrages de la même période appartenant à des genres similaires. On peut signaler les meilleurs:

Traduction par Jacques Dars, sous le titre *Randonnées aux sites sublimes*, une très importante sélection des récits de voyage de 徐霞客.

Traduction par Brigitte Teboul du 陶庵夢憶 de 張載 (*Souvenirs rêvés de Tao'an*, Gallimard, 1995).

Traduction par Jacques Pimpaneau d'une centaine de récits tirés du fameux 閱微草堂筆記 de 紀昀, qui est comme on le sait considéré comme un des trois chefs-d'œuvre des Qing, avec le 聊齋志異 et le 紅樓夢 (*Notes de la chaumière des observations subtiles*, Kwok On, 1995).

Il s'agit donc d'une nouvelle orientation de la sinologie française promise sans doute à un riche avenir. Il

faut remarquer à ce propos que Martine Vallette-Hémery, Brigitte Teboul et Jacques Dars sont tous trois des traducteurs de grand talent, doué d'une extrême sensibilité, et qui ont su parfaitement faire passer en français la finesse délicate des 日記 et des 筆記 de la fin des Ming et du début des Qing.

Un autre signe bien révélateur de l'élargissement de l'intérêt du public et des savants français pour les lettres chinoises est la publication toute récente (<Recueil de la Montagne du Sud>, Gallimard, 1998) de la traduction complète, par Pierre-Henri Durand, du 南山集 de 戴名世, composé par son disciple 尤雲鄂. L'auteur avait déjà publié, en 1992 (<Lettrés et pouvoir; un procès littéraire dans la Chine impériale>, Ecole des Hautes Etudes en Sciences sociales) un très important ouvrage sur le fameux procès fait sous le règne de Kangxi à Dai Mingshi, accusé d'avoir manifesté dans ses écrits de la nostalgie à l'égard des Ming et d'avoir évoqué sans ménagement les cruautés des mandchoues lors de l'invasion de la Chine. Dans ce volumineux ouvrage, étude historique rigoureuse, l'auteur avait pu mettre en lumière l'étroite imbrication de la littérature et de la politique en Chine, et a ainsi apporté de précieux matériaux sur la définition de l'orthodoxie littéraire chinoise. Le < Recueil ... > est à un public beaucoup plus large. L'auteur a le mérite de faire découvrir une oeuvre littéraire de valeur, mais aussi dans grand intérêt historique, non seulement à cause du procès fait à Dai, mais aussi parce que celui-ci est devenu à la fin des Qing un des héros des intellectuels chinois en lutte contre la tyrannie mandchoue. Mais l'intérêt le plus grand de ce travail est certainement le parti qu'a pris l'auteur de traduire, sinon la totalité du recueil, du moins un choix important et représentatif de pièces appartenant à divers genres en prose: essais 說, préface, lettres, biographies, épitaphes 銘, récits 記 et journaux 日記, en tout plus de 50 pièces, ainsi que trois préfaces de l'oeuvre, écrites par des admirateurs de Dai, à commencer par You Yun'e. Ainsi le lecteur français a-t-il enfin la possibilité de découvrir l'aspect général d'un recueil de lettrés de la Chine ancienne, dans toute sa diversité, en même temps que de découvrir des genres de courtes pièces en prose, en général considérés en occident comme secondaires, mais qui, comme on le sait, viennent en Chine très haut dans l'appréciation littéraire. Pour la culture française, qui se représente souvent les auteurs comme cantonnés dans un genre, en particulier soit comme des romanciers, soit comme des poètes, il s'agit là d'une véritable fenêtre ouverte sur la culture chinoise, et il est à espérer que cette première tentative par d'autres. Le traducteur du Nanshanji envisage d'ailleurs de publier même un recueil de 八股文, pour montrer au public français les aspects réels de l'écrit littéraire chinoise.

Dans cette ordre d'idée, et bien qu'il ne s'agisse pas à proprement parler de littérature, je mentionnerai, pour en finir avec les Ming-Qing, la traduction par Roger Darroubers, du <Manifeste à l'empereur adressé par les candidats au doctorat> (上清帝第二書) de Kang Youwei en 1895 (Youfeng, 1996).

* なお本稿は、『中國文學報』（京都大學中國文學會）第57冊に寄せられたフランス高等研究院教授 François Martin 氏の「近十年のフランスにおける中國文學研究の發展（上）」の原仏文である。掲載を許可くださったMartin氏に謝意を表する。

いまや10号に達した「極東アジア研究紀要」

Dixième volume des *Cahiers d'Extrême-Asie*

フランス国立極東学院
ユベール・デュルト
(日本語訳：大川 亘)

フランス国立極東学院(EFEO)京都支部の機関誌、「極東アジア研究紀要(カイエ・デクストレーム・アジー)」は創刊いらい15年足らずの間に、数ある東洋学研究の手だてのなかで、一定の地位を得るまでになった。同誌本来の性格はどのような点にあるか? いかなる存在理由が考えられるか? 現在まで、どのような成果を挙げているか?

最初の質問に答えるために、まず「極東アジア研究紀要」の表紙について若干の説明を加えよう。表紙を飾るデザインはアンナ・ザイデルの創案で、かの有名な信貴山縁起絵巻にヒントを得たものである。ただ、このアイデアから「流用」したものがひとつある。剣の護法の童子が法輪を追いかける図柄は、フランス国立極東学院(EFEO)を表わすロゴマークとなった。「流用」したのはそれだけではない。フランス語タイトルの字体は、意欲的な雑誌で、最初はサイゴン、ついで東京でそれぞれ発行されたものの、ずっと以前に廃刊となった「フランス・アジー」のそれを模している。アンナ・ザイデルはそのようにして、われわれがEFEO本部から「極東アジア研究紀要」の出版を命じられた当時、「フランス・アジー」誌の創刊者ルネ・ド・ベルヴァルが、編集者としての経験から手を貸してくれたことへの感謝の念と、自分たちがある意味で流れを同じくするむねを表明しようとしたのである。最後に「カイエ」という呼び名だが、第二次世界大戦後、「EFEO紀要」があまりに大部で製本が困難となった時代に、ヴェトナム極東学院通信にたいして使われていたものである。

以上いろいろなことから、幾つかの点が明らかになってくる。まず「極東アジア研究紀要」の第一号発行(1985)から死去(1991)にいたるまでの数年間、アンナ・ザイデルがつねに一貫して熱意と有能ぶりを発揮したことである。彼女は自分の雑誌と一体化し、どのような細かい点にも通じていた。「カイエ」誌が今日なお生き続けているのは、アンナ・ザイデルの人柄と学績の放つ輝きによるものである。

次の点は、地方分権化が論議的となった時代に、「カイエ」誌が極東学院本部の研究計画や伝統的方針に沿って活動していたことである。ここであらためて説明すると、極東学院本部から受けた指示は、「欧米および日本人研究者のための研究センターであり、同時に世界各国の東洋学者にとって交流の場ともなる、学院京都支部の各種研究活動」の成果を、一定の定期刊行物のかたちにとまとめること、しかも仏教用語事典「法宝義林」に比べて出版が早く、経費も少なめで、内容もあまり専門的すぎないものを、という内容であった。

最後に、表紙にはつねに同じ装飾模様をあしらった上、時に応じてほかのイラスト

トを何種類か加えるレイアウトだが、そこにはわが極東学院の研究方針が端的に示されている。つまり過去・現在における東アジアの文化、社会をテーマとする研究でありながら、とりわけ宗教的ものごとを重視し、それも主として人類学的・文化的側面から考察するやり方である。

「極東アジア研究紀要」は、東アジアの現地で活動している学究たちにとっての、いわば論壇のような存在として生まれた。同誌は特定のテーマを扱った学際的研究成果、それもやはり東アジアの社会、文化、とくに宗教と関連したものを、一般に広める手だてとして発展してきた。

これは年刊の専門誌で(2年分を一つにまとめた合併号が若干ある)、英仏両語を併用する方式をかたく守っている。このやり方には、読者の幅を広げる以外に次の長所がある。一方の言語で書いた論文の前に、かならずもう一方の言語による要約を掲げるのである。この要約は論文とは別の筆者に委ねる場合が多いが、そのほうが本文の際立ったところや斬新さがはっきり出てくる。「カイエ」誌は日本国内で発行のため、第7号からはふつう目次の日本語訳を添えるようになった。

「極東アジア研究紀要」は、編集長(最初はアンナ・ザイデルがつとめたが、他界後はユベール・デュルトが引き継いだ)編集・校閲委員会によって運営されるが、後者は基本的には日本・中国・韓国地域で活動する新旧の極東学院研究員や、アジア各地域でフランスの東洋学研究を代表する学究の集まりである。「カイエ」誌は、予約購読を強いる団体機関誌のたぐいではない。毎号とも、定期購読者に案内状を優先的に発送して刊行を通知することになっている。

第三号(1987年号)以来、毎号とも第一部は特集号のかたちをとり、第二部は現在進められている各種の研究にたいし、一定の論議の場を提供するという、前にも触れた当初の目標をそのまま守っている。したがって読者はまず、東アジアの宗教、社会、あるいは文化に関する特定の研究分野を扱った論文集を読むことになる。こうした内容を持つ第一部の編集責任は、当の関係テーマの専門家で、大抵は編集委員会のメンバーに属する客員編集者の手に委ねられる。次に読者は、アジアの現場で活動する研究者の寄稿による、第二部の「論壇」に目を通すのである。この寄稿欄は研究レポート、論争、書評、主としてアジアで行なわれた研究に関する参考文献の注解といった内容である。これまで定期的に取り上げてきたのは、日本で最近出版の、とりわけ仏教関係の著作であったが、「カイエ」誌では紹介範囲を、できれば中国や韓国やヴェトナムで出た研究書まで広げたいと願っている。いま一つの関心事として、フランス語の東洋学研究書を英語圏の読者に紹介する意向も抱いている。この観点からぜひ目を通して頂きたいのは、たとえばアンナ・ザイデルが見事にまとめあげた、第二次世界大戦後における欧米道教研究の書目一覧である。これは「極東アジア研究紀要」第5号(1989-1990年合併号)に掲載されている。

「カイエ」誌は、記事のなかに漢字を遠慮なく組み入れている。また、論文に図表や写真を挿入する場合もある。「極東アジア研究紀要」の発行部数は多くて一千部にとどまる。ふつう組版はEFEO京都支部で行なうが、印刷は同市の印刷業者が担当している。配本はヨーロッパ各国の場合はパリ、それ以外の諸国は京都を起点

に行なわれる。

ファックスや電子メールの時代にあつて、出版物を特定の地点で発行することが以前ほど重要ではなくなつたにせよ、日本で刊行されている「極東アジア研究紀要」が、この国では研究活動が活発であり、そのなかで京都が東洋学の国際的中心地の役割を演じているところから、とりわけ恵まれた位置にあるのは確かである。その上、フランスの東洋研究は目覚ましい評価を得たのは確かでも、いわゆるアジア太平洋地域では従来あまりにも長い間、人手不足であつた事実も認めなければならない。なにしろ、地球の広大な部分を占めるこの地域はますます独自性を増し、来世紀はさらに重要な役割を担おうとしているのである。かかる地域にあり、しかもそのささやかな規模において、「極東アジア研究紀要」は明らかに学問的需要に応えてきた。なぜなら日本のみならず、アジアの中国文化圏諸国をはじめ、カリフォルニアやカナダの太平洋沿岸(場合により中南米の一部の国も含めて)、さらにオーストラリア、ニュージーランドも含めた太平洋周辺の全域においても、大学や研究界の読者と、きわめて迅速に密接な関わりを持つことができたからである。この場合も「極東アジア研究紀要」は二重の意味で利用価値がある。フランスの学術研究からすれば、多方面との交流や各種の情報など「カイエ」誌独自の利点が活用できるし、また同誌がつねに知識の収集に意欲を燃やしているだけに、フランス側の研究内容をいっそう効果的に紹介できるようになる。なおここで「極東アジア研究紀要」が日本側から好意的に迎えられ、げんに1994年に立命館大学の中国学教授、橋本詢氏を記念した賞を授けられたことをお報らせしておこう。

「極東アジア研究紀要」が宗教研究を重視する方針を選んだのは一つにはおそらく、編集委員会のメンバーの大半がフランス東洋学の伝統、つまり仏教、道教、シャーマニズム、神道などアジアの主要宗教のもたらした、教義上ないし社会的・文化的要素を研究の中心とする流れに属するためであろう。この学問的伝統は長きにわたってコレージュ・ド・フランス、高等研究院、社会科学高等研究院などに見られたものである。なお「極東アジア研究紀要」の中心テーマや方法論は、絶えず現状に合わせて見直されている。だが一定の伝統に属するというだけでは、新旧の宗教を重視する十分な理由にはならない。現地の研究者はそれぞれの個人的経験によって、宗教的ものごとが歴史上ばかりか、自分の研究対象が現在において示す実態にも巨大な働きを及ぼしている事実を、実地に確かめることができた。したがって、以上の研究方針は恣意的というより、むしろ意識的に選んだものである。

ここで締めくくりに、「極東アジア研究紀要」の特集号に収録した「関係論文集」のテーマを振り返ってみよう。

第三号(1987):「敦煌学」。当時はEFEO研究員で、現在は同学院の院長と高等研究院教授をつとめる、客員編集者Jean-Pierre Drègeが、藤枝晃教授に捧げた特集。

第四号(1988)および第五号(1989-1990)：「道教研究」。EFEO研究員で客員編集者のJohn LagerweyがMax Kaltenmark教授に捧げたもの。

第六号(1991-1992)：「韓国のシャーマニズム」。客員編集者はフランス国立科学研究センター研究員、Alexandre Guillemozである。

ちなみに、この号には豊富な注釈つき文献目録が添えてあるが、これは単なるシャーマニズム研究の域を越えたもので、朝鮮を専門分野とした現代欧米の「人文科学」研究の全容が見渡せる。そこでは、中欧や東欧で出版された研究書に多大のスペースが与えられている。

第七号(1993-1994)：「禅の研究」。スタンフォード大学教授をつとめる客員編集者のBernard Faureが、柳田聖山教授に捧げたもの。

第八号(1995)および第九号(1996-1997)：「東アジアの伝統的宗教」。これは全体が一千ページ以上に及ぶ「アンナ・ザイデル記念特集」を2巻に分けたもので、編集者はEFEO研究員Hubert Durt。

第十号(1998)：「中国の聖地信仰と聖人信仰」。編集者はEFEO研究員Franciscus Verellen。

1996年1月6日

フランス国立極東学院京都支部、法宝義林研究所にて

10 (1998)

Culte des sites et culte des saints en Chine

Responsable de la publication : Franciscus VERELLEN

Rituel territorial / Territorial ritual

Fiorella ALLIO	Procession et identité : mise en scène rituelle de l'histoire locale
Kenneth DEAN	Transformations of the <i>she</i> (altars of the soil) in Fujian
John LAGERWEY	<i>Dingguang Gufo</i> : Oral and written sources in the study of a saint

Communautés de mémoire / Communities of memory

Marianne BUJARD	Le culte du Joyau de Chen : Culte historique-culte vivant
Susan NAQUIN	Sites, saints, and sights at the Tanzhe Monastery
Franciscus VERELLEN	Shu as a hallowed land: Du Guangting's <i>Record of Marvels</i>
Delphine ZIEGLER	The cult of the Wuyi mountains and its cultivation of the past: A topo-cultural perspective

De la localité à la région / From place to region

Sandrine CHENIVESSE	Fengdu: cité de l'abondance, cité de la male mort
Terry KLEEMAN	Sources for religious practice in Zitong: The local side of a national cult
LIN Fu-shih	The cult of Jiang Ziwen in medieval China.

Effigies et culture matérielle / Effigies and material culture

Glen DUDBRIDGE	Buddhist images in action: Five stories from the Tang
Xu Pingfang	Les découvertes récentes de statues de Sengqie et le culte de Sengqie
Lothar von FALKENHAUSEN	Archaeology and the study of Chinese local religion: A discussant's remarks

1998-1999 コレージュ・ド・フランス開講講座（東洋学関係）

Sciences Historiques, Philologiques et Archéologiques

Langues et Religions Indo-Iraniennes

Jean Kellens "Promenade dans les Yasts à la lumière de travaux récents,

les vendredis à 9h30, dans la salle 1. (Ouverture le 20 novembre.)

Séminaire : "Lecture indo-iranienne de quelques hymnes védiques,

les vendredis à 11h, dans la salle 9. (Ouverture le 20 novembre.)

Histoire du Monde Indien

Gérard Fussman "Le texte sanskrit du Sukhvativyuha, "

les jeudis, à 18h, dans la salle 1. (Ouverture le 7 janvier.)

Séminaire : "Analyse de l'espace urbain à Chandernagore à partir de documents indiens, numérisés, modélisés et traités dans un Système d'Informatique,

les jeudis, à 10h, dans la salle 9. (Ouverture le 7 janvier.)

Histoire de la Chine Moderne

Pierre-Étienne Will "Les figures de l'administrateur en Chine (1600-1930),

les mercredis, à 14h30, dans la salle 1. (Ouverture le 13 janvier.)

Séminaire : "Recherches sur le Mengqi bitan de Shen Gua (1031-1095),

les mercredis à 15h45, dans la salle 8. (Ouverture le 13 janvier.)

Histoire et Civilisation du Monde Byzantin

Gilbert Dagron *Le cours n'aura pas lieu.*

Séminaire : *Verts et Bleus : histoire et historiographie d'une structure dualiste,*

les jeudis, à 11h, dans la salle de Séminaire du Centre d'Histoire et Civilisation de Byzance (52, rue du Cardinal Lemoine, Paris V).

(Ouverture le 7 janvier.)

1998-1999 フランス国立高等研究院開講講座（東洋学関係）

HISTOIRE ET CIVILISATIONS DE L'ASIE

Histoire économique et sociale de la Chine prémoderne

Pierre-Étienne Will, directeur d'études

1. Théâtre et politique au XIXe siècle : recherches sur le "Miroir du fonctionnaire" (*Juguan jian*) de Huang Xieqing (vers 1850).

Lundi de 14 h à 16 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 23 novembre.

2. Séminaire pédagogique : introduction générale à la recherche, discussion de travaux d'étudiants et du directeur d'études.

Lundi de 10 h à 12 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 23 novembre.

Société, pouvoirs et processus politiques dans la Chine du XXe siècle

Yves Chevrier, directeur d'études

La construction du politique dans la Chine du XXe siècle.

1er et 3e mardis du mois de 16 h à 18 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 3 novembre.

Michel Bonnin, maître de conférences

1. Rapports entre pouvoir et société en République populaire de Chine.

1er et 3e vendredis du mois de 10 h 30 à 12 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 6 novembre.

2. Hong Kong : bilan de 150 ans d'histoire coloniale (avec Jean-Philippe Beja, directeur de recherche au CNRS).

2e et 4e vendredis du mois de 10 h 30 à 12 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 13 novembre.

Histoire de l'Asie centrale post-mongole

Vincent Fourniau, maître de conférences

Espace, peuplement et identité ethno-politique en Asie centrale post-mongole.

Se renseigner au secrétariat du CHDT, cf. ci-après.

Histoire économique et sociale de l'Inde et de l'Océan Indien, XVe-XVIIIe siècles

Sanjay Subrahmanyam, directeur d'études

L'image de la royauté et la culture des cours en Océan Indien (1450-1750).

Mardi de 11 h à 13 h (salle 11, 105 bd Raspail), à partir du 17 novembre.

Histoire de la Corée coloniale

Alain Delissen, maître de conférences

Histoire sociale coloniale (1876-1945) : peut-on parler de "modernisation sociale" ?

Quatrième volet : la terre et le monde rural.

1er et 3e lundis du mois de 18 h à 20 h (salle de cours, Maison de l'Asie, 22 av du Président-Wilson 75116 Paris), à partir du 2 novembre.

ANTHROPOLOGIE HISTORIQUE

Anthropologie économique du monde chinois

Michel Cartier, directeur d'études

Chine, Corée, Japon : 1500-1900.

Jeudi de 11 h à 13 h (salle 4, 105 bd Raspail), à partir du 5 novembre.

L'islam dans le sous-continent indo-pakistanaï

Marc Gaborieau, directeur d'études

L'invention du prosélytisme : (2) conversions, politique et organisations missionnaires, 1920-1990.

Lundi de 14 h à 16 h (salle 801, 54 bd Raspail), à partir du 16 novembre.

Histoire et anthropologie de l'Islam méditerranéen

Lucette Valensi, directeur d'études

1. D'Orient en Occident : échanges culturels, transferts de pratiques.

Mardi de 11 h à 13 h (salle 2, 105 bd Raspail), à partir du 10 novembre.

2. Entretiens sur les Juifs du Maghreb et de la Méditerranée (avec Annie Dayan-Rosenman, maître de conférences à l'Université de Paris-VII).

1er et 3e jeudis du mois de 17 h à 19 h (salle 2, 105 bd Raspail), à partir du 19 novembre.

Sociologie historique de l'Islam

Houari Touati, maître de conférences

Le monde des livres, le monde des lecteurs : histoire d'une conjonction.

2e et 4e lundis du mois de 14 h à 16 h (salle 5, 105 bd Raspail), à partir du 9 novembre.

Anthropologie historique des pratiques religieuses dans l'Islam méditerranéen

Hassan Elboudrari, maître de conférences

- 1. La sainteté : signes et modèles.**
- 2. Pratiques magiques et fonction symbolique.**
- 3. Le corps, lieu et enjeu de l'expérience religieuse.**

Anthropologie historique des modèles politiques dans l'Islam méditerranéen

Jocelyne Dakhliya, maître de conférences

Formes de la souveraineté, formes de la sujétion.

2e et 4e mardis du mois de 14 h à 16 h (salle 3, 105 bd Raspail), à partir du 10 novembre.

Techniques et savoirs ordinaires dans le monde chinois

Françoise Sabban, directrice d'études

Introduction à l'histoire et à l'anthropologie des techniques du monde chinois.

1er et 3e vendredis du mois de 15 h à 17 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 20 novembre.

Françoise Sabban et François Sigaut, directeurs d'études

Analyse comparative des techniques et des formes de consommation alimentaire.

2e et 4e vendredis du mois de 15 h à 17 h (salle 6, 105 bd Raspail), à partir du 13 novembre.

ANTHROPOLOGIE SOCIALE, ETHNOGRAPHIE ET ETHNOLOGIE

Anthropologie sociale de l'Inde et du monde indien

Jean-Claude Galey, directeur d'études

Caste et système des castes en Asie du Sud : reconductions et mutations de valeurs.

Mercredi de 16 h à 18 h (salle 5, 105 bd Raspail), à partir du 4 novembre.

Anthropologie et histoire des sciences dans le monde indien

Francis Zimmermann, directeur d'études

1. Indulekha de Chandu Menon. La naissance du roman.

1er et 3e mercredis du mois de 9 h à 11 h (salle 4, 105 bd Raspail), à partir du 4 novembre.

2. Ethnologie comparée. L'aporie de Yale.

Jeudi de 16 h à 18 h (salle 7, 105 bd Raspail), à partir du 5 novembre.

Ethnologie et sociologie de l'Asie du Sud-Est et du monde insulindien

Georges Condominas, directeur d'études (*)

Développement des espaces sociaux et rapports interethniques en Asie du Sud-Est continentale et insulaire (y compris Madagascar).

Mardi de 10 h à 13 h (salle 8, 105 bd Raspail), à partir du 10 novembre.

Anthropologie culturelle du monde chinois contemporain

Joël Thoraval, maître de conférences

1. Problèmes d'anthropologie culturelle dans le monde chinois.

1er et 3e mercredis du mois de 15 h à 17 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 4 novembre.

2. Confucianisme et modernité.

1er et 3e jeudis du mois de 14 h à 16 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 5 novembre.

LINGUISTIQUE, SÉMANTIQUE

Linguistique japonaise et occidentale : problèmes, méthodes et histoire

Irène Tamba, directeur d'études

Les niveaux de l'analyse contrastive (2) : les structures de dépendance et d'adjonction en syntaxe et en sémantique.

Jeudi de 13 h à 15 h (salle 1, 105 bd Raspail), à partir du 12 novembre.

Langue, savoirs et société en Chine

Viviane Alleton, directrice d'études

Écriture chinoise : fonctionnement et représentations.

Mardi de 14 h à 16 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 3 novembre.

Linguistique chinoise : histoire de la langue et de ses représentations

Alain Peyraube, directeur d'études avec Redouane Djamouri, chargé de recherche au CNRS

Syntaxe et sémantique historiques du chinois archaïque.

Lundi de 16 h 30 à 19 h 30 (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 9 novembre.

新刊紹介

アンヌ・チェン著『中国思想史』

Anne CHENG, *Histoire de la pensée chinoise*, Éditions du Seuil, Paris 1997, 650p., bibliog., index, 240FF.

こういう題名の書物が、しかもこの分量で、一人の研究者によって書かれるということ自体がもはや驚異であろう。

全体は、古代から近代まで時代を追って6部に分かれる。第1部は紀元前5世紀までの中国思想の形成期を扱う。中国における「思想」や「伝統」の西洋のそれとは異なる意味が序章において説明される。第2部は紀元前3世紀までの戦国時代の思想の交流期を扱う。最近の欧米における老子研究を反映し、老子に先行する思想として荘子が論じられているのが注目される。第3部は紀元4世紀までの秦漢魏晋における儒教の変質と道教思想の萌芽の時代を扱う。第4部は再び紀元1世紀に溯り、仏教の受容にともなう中国思想の大転換期を10世紀まで概観する。第5部は16世紀までの宋明における儒仏道の交渉と融合の時代を、第6部は清朝における実証主義の精神の形成、ならびに西欧思想との出会いと葛藤という二つの柱を軸に、今世紀初頭に至る近代的思惟の揺籃期を扱う。

儒教と仏教と道教が常に総体的な視野の中で論じられていることが本書の特徴のひとつであろう。中国仏教の専門家から見れば、仏教に関する記述には不十分な点や、あるいは疑問の箇所が少なくないかも知れない。儒教の専門家や道教の専門家から見ても同様のことは言えよう。しかし、これは儒も仏も道も取り混ぜて、ひとつの統体をなしている「中国思想」の通史である。

いったいこのような研究を我々はどうのよう

に評価すべきなのか。儒教に関して、あるいは道教や中国仏教に関して膨大な研究業績を日本人は持っているであろう。しかし、ごく一部の例外を除いては、中国の思想や諸宗教を一体として把握し理解する習慣を、我々は近年まで維持してこなかったように思われる。ここにフランスと日本の中国研究の方向性の違いが端的に現れているとは言えないであろうか（この点に関する最も新しい問題提起として、福井文雅氏の『漢字文化圏の思想と宗教』五曜書房、1998、pp.318sq.を参照）。

著者アンヌ・チェン氏の既刊の研究は、主として儒教に関するものである。今文派の何休撰『公羊解詁』の分析を通じて後漢の政治思想を明らかにし、その訓詁学の形成過程における役割を論じた学位論文『漢代儒教の研究』(*Étude sur le confucianisme Han. L'élaboration d'une tradition exégétique sur les Classiques*, Mémoires de l'Institut des Hautes Études Chinoises, XXVI, Collège de France, Paris 1985) ならびに、清末公羊学派におけるその継承と変法運動下での影響を扱った論考(“Tradition canonique et esprit réformiste à la fin du XIX^e siècle en Chine: La résurgence de la controverse *jinwen/ guwen* sous les Qing”, *Études chinoises*, XIV/2, 1997, pp.7-42) があり、他に『易経』や『淮南子』の研究が知られる。また『論語』の仏訳 (*Entretiens de Confucius* (traduction du chinois et présentation), Éditions du Seuil, Paris 1981) はつとに著名である。

チェン氏はかつての東洋語学校、現在の東洋言語文化学院 (Institut National des Langues et Civilisations Orientales) の教授を勤めておられる。14区の Cité Universitaire の近くにある高等師範学校女子部 (École Normale Supérieure de Jeunes Filles) のご出身である。ノルマリエンヌである。Les normaliennes terribles!

ノルマリヤンの恐ろしさについては私にも小さな思い出がある（ここからは蛇足です）。

十年以上も前のことだが、南フランスにあるカトリックの神学大学に留学した。ローマ法王庁がパリとトゥールーズに認可したうちのひとつで、制度は国立とは異なる。哲学課程二年の上に神学課程が三年あり、中世から今に至るまで変化がない。先生は三十人全員が聖職者で、学生も三十人。修道院みたいな校舎に寝起きする。指導教授が二人つく。

私の指導教授のうち一人は既に決まっていた。歴史神学のロカシェ先生で、キリスト教図像学の講座も担当しておられた。ロッカマドゥール巡礼教会に関する浩瀚な研究を発表されている。ロカシェ先生は大勉強家である。二人分の仕事を一人でおやりになる。神父さんだから奥さんはいない。精力絶倫が風貌にも現れている。神学を究め、美術史を極める。巡礼教会の研究も第一部が神学、第二部が美術史である。ただ、第一部と第二部の間にはあまり連絡がない。

ロカシェ先生とは以前から連絡を取り合っていたが、もう一人の指導教授が決まらない。学部長のダジャンス先生に相談に伺ったところ、専攻分野や研究テーマなどいろいろ聞かれた。出身大学も聞かれた。出身は筑波大学ですと言っても、そんな大学が日本のどこにあるのか普通のフランス人は知らない。もとは東京にあった高等師範学校ですと説明した。訳せば *École Normale Supérieure* になる。するとダジャンス先生の顔が紅潮した。「君もノルマリヤンかね！私もノルマリヤンだ！！我々はノルマリヤンではないか！！！」ノルマリヤンは謙遜しない。ノルマリヤンは同窓意識が強い。他の先生方は、ローマのプロバガンダ・フェーデやグレゴリアン神学大学の出身者が多かったから、ダジャンス先生は少

し浮いていた。それにしても「君もノルマリヤンか」と聞かれて「はい」と答えるのはいくらなんでも図々しい。パリのエコール・ノルマルと東京高等師範（の行き着いた先の筑波大学）では月とスッポンである。しかし「月とスッポン」をフランス語でどう言うのか知らなかったので、「はい！！！」と答えてしまった。握手までしてしまった。かたじけなくも勿体ないこの誤解のおかげで、ダジャンス先生は私の指導教授になってくださった。

ダジャンス先生のご専門は教義神学で、アルベルトゥス・マグヌスの研究で知られる。エコール・ノルマルを卒業されたあと、パリ大学の高等研究院で学位を取られ、ローマのフランス学院 (*École Française de Rome*) に留学された。フランス学院といえば、昔ハノイにあった極東学院が我々には親しい名だが、同じ組織はローマとアテネにもあり、フランス研究所 (*Institut Français*) の名でカイロ、イスタンブール、テヘランにもある。いずれも選りすぐりの若い研究員を現地において長期の研究に従事させる名高い研究機関である。

ローマにおられた頃先生の研究は、古代末期の家族図に関するものだが、一見したところ宗教とは関係なさそうに思われる肖像画の成立の背景にキリスト教の信仰があり、それを成り立たせる神学的基盤があることを明らかにされたものである。形態の変容の中に、神学の展開の痕跡を読み取っていくその作業の中で、神学と美術史とが渾然一体となって分かち難く結びついている。これは必ずしもどの時代の作品にも適用できる方法ではないのかも知れないが、神学と信仰と芸術とはどれもピタリとは一致しないのではないかと漠然と考えていた私には、かなりの衝撃であった。 *Les normaliens terribles!*

(菊地章太)

総会報告

昨年度の総会は、98年3月15日に、京都・東一条の京大会館で行われた。東京からは蘆田孝昭教授をはじめ、多くの会員が来洛され、鳥取大学の門田眞知子教授のご講演も盛況のうちに終えることができた。また、中国より京都大学に客員として滞在中であった葛兆光教授と戴燕女士にも参加いただくことができた。

総会に先立ち、13時20分より、役員会が開かれ、総会に提出すべき案件の検討が行われた。出席は、福井文雅会長・興膳宏代表幹事・岡本さえ監事・坂出祥伸・笠沙雅章・御牧克己・山田利明・森由利亜・齋藤希史の各評議員。

総会は、14時30分より、興膳代表幹事の司会で始められ、まず福井会長の挨拶ののち、興膳代表幹事より会務報告があった。続いて森会計監事より、平成9年度決算および10年度予算の説明があり、ともに承認された。つづいて役員の改選が行なわれ、福井会長が名誉顧問となり、会長に興膳宏代表幹事、代表幹事に中谷英明評議員が就任することが承認された。また、評議員にはあらたに岡本さえ監事、菊池章太会員が加わることが承認され、その他の幹事・監事・会計監事・推薦委員会はすべて留任となった。

八年間の長きに亘って会長職を勤めら

れた福井会長より今般の会長交代について説明があり、また、東京での事務においては山田利明評議員に大変ご苦勞を願ったことへの感謝の言葉があった。

その他の項として、石沢良昭評議員がカンボジア国王より勲章を授与されたとの報告があった。日本では勲二等旭日勲章にあたる由。また、名誉会長の山本達郎先生の奥様が亡くなられたとの報告があり、ご冥福をお祈り申し上げた。

総会に引きつづいて、門田教授の講演「ポール・クローデルとジュディット・ゴーチェと曾仲鳴」が行なわれた。内容については本「通信」掲載記事をご覧ください。

懇親会は祇園・石段下の「豆菜」で持たれ、豆腐料理で京都の春の夜を歓談のうちに楽しく過ごした。

(S)

日仏東洋学会平成9年度決算

◇収入

普通会員会費	306,000
前年度繰越金	351,732
日仏会館補助金	0
利子	628
計	658,360



◇支出

印刷費	182,700
通信費	56,380
会費	0
消耗品費	3,795
支払報酬費	13,000
雑費	8,000
旅費	50,000
予備費	0
計	313,875

総収入－総支出： 658,360 円－313,875 円＝344,485 円
平成9年度残金 344,485 円は、平成10年度への繰越金とする。

以上の通り相違ありません。
平成10年3月27日

日仏東洋学会監事

加藤 純章 
岡本 さえ 

日佛東洋學會會員名簿

赤松 明彦
AKAMATSU Akihiko

秋山 光和
AKIYAMA Terukazu

アンサール、オリウイエ
ANSART, Olivier

蘆田 孝昭
ASHIDA Takaaki

シャエリエ、イサヘル
CHARRIER, Isabelle

竺沙 雅章
CHIKUSA Masaaki

デアヌ、フロリン
DELEANU Florin

デュケンヌ、ロベール
DUQUENNE, Robert

デュルト、ユベール
DURT, Hubert

江上 波夫
EGAMI Namio

藤田 宏達
FUJITA Koutatu

福井 文雅
FUKUI Fumimasa

福島 仁
FUKUSHIMA Hitoshi

ギメ美術館
Guimet(Musee)

濱田 正美
HAMADA Masami

羽田 正
HANEDA Masashi

原 實
HARA Minoru

服部 正明
HATTORI Masaaki

日佛東洋學會會員名簿

平井 宥慶
HIRAI Yuhkei

平川 彰
HIRAKAWA Akira

廣川 堯敏
HIROKAWA Takatoshi

堀池 信夫
HORIIKE Nobuo

市古 貞次
ICHIKO Teijū

池田 温
IKEDA On

生田 滋
IKUTA Shigeru

石田 憲司
ISHIDA Kenji

石上 善應
ISHIGAMI Zenno

石井 米雄
ISHII Yoneo

石澤 良昭
ISHIZAWA Yoshiaki

岩田 孝
IWATA Takashi

彌永 信美
IYANAGA Nobumi

彌永 昌吉
IYANAGA Shokichi

門田 真知子
KADOTA Machiko

柿市 里子
KAKIICHI Satoko

金谷 治
KANAYA Osamu

神田 信夫
KANDA Nobuo

日佛東洋學會會員名簿

狩野 直禎
KANO Naosada

加藤 純章
KATO Junsho

川合 康三
KAWAI Kozo

川本 邦衛
KAWAMOTO Kunie

川崎ミチコ
KAWASAKI Michiko

菊地 章太
KIKUCHI Noritaka

木津 祐子
KIZU Yuko

小林 正美
KOBAYASHI Masayoshi

小谷 幸雄
KOTANI Yukio

古藤 友子
KOTOH Tomoko

興膳 宏
KOZEN Hiroshi

栗原 圭介
KURIHARA Keisuke

楠山 春樹
KUSUYAMA Haruki

桑山 正進
KUWAYAMA Shoshin

京戸 慈光
KYODO Jiko

前田 繁樹
MAEDA Shigeki

丸山 宏
MARUYAMA Hiroshi

増尾伸一郎
MASUO Shin'ichiro

日佛東洋學會會員名簿

松原 秀一
MATSUBARA Hideichi

御牧 克己
MIMAKI Katsumi

三崎 良周
MISAKI Ryoshu

宮澤 正順
MIYAZAWA Masayori

森 由利亞
MORI Yuria

森賀 一惠
MORIGA Kazue

森安 孝夫
MORIYASU Takao

明神 洋
MYOJIN Hiroshi

中村 元
NAKAMURA Hajime

中村 璋八
NAKAMURA Shohachi

中谷 英明
NAKATANI Hideaki

成瀬 隆純
NARUSE Takazumi

成瀬 良徳
NARUSE Yoshinori

小河 織衣
OGO Oriie

岡本 さえ
OKAMOTO Sae

岡本 天晴
OKAMOTO Tensei

丘山 新
OKAYAMA Hajime

岡山 隆
OKAYAMA Takashi

日佛東洋學會會員名簿

小名 康之
ONA Yasuyuki

大谷 暢順
OTANI Chojun

尾崎 正治
OZAKI Masaharu

定方 晟
SADAKATA Akira

齋藤 希史
SAITO Mareshi

坂出 祥伸
SAKADE Yoshinobu

酒井 忠夫
SAKAI Tadao

櫻井 清彦
SAKURAI Kiyohiko

白杉 悦雄
SHIRASUGI Etsuo

白戸 わか
SHIRATO Waka

菅原 信海
SUGAHARA Shinkai

砂山 稔
SUNAYAMA Minoru

鈴木 董
SUZUKI Tadashi

高橋 稔
TAKAHASHI Minoru

高崎 直道
TAKASAKI Jikido

高田 時雄
TAKATA Tokio

武内 紹人
TAKEUCHI Tuguhito

田中 文雄
TANAKA Fumio

日佛東洋學會會員名簿

館野 正美
TATENO Masami

徳永 宗雄
TOKUNAGA Muneo

礪波 護
TONAMI Mamoru

虎尾 達哉
TORAO Tatsuya

坪井 善明
TSUBOI Yoshiharu

都留 春雄
TSURU Haruo

梅原 郁
UMEHARA Kaoru

ワッセルマン、ミシェル
WASSERMAN, Michel

八木 徹
YAGI Toru

山田 均
YAMADA Hitoshi

山田 利明
YAMADA Toshiaki

山本 澄子
YAMAMOTO Sumiko

山本 達郎
YAMAMOTO Tatsuro

山折 哲雄
YAMAORI Tetsuo

矢野 道雄
YANO Michio

吉田 敦彦
YOSHIDA Atsuhiko

吉田 豊
YOSHIDA Yutaka

湯川 武
YUKAWA Takeshi

日佛東洋學會會員名簿

由木 義文
YUKI Yoshifumi

遊佐 昇
YUSA Noboru

湯山 明
YUYAMA Akira

白井 順

日佛東洋學會會員名簿宛先不明リスト

*以下の方が宛先不明で郵便物が戻ってきました。新住所をお知らせ下さい

遠藤 光暁
ENDO Mitsuaki

井狩 彌介
IKARI Yasuke

石田 秀實
ISHIDA Hidemi

澤 美香
SAWA Mika

庄垣内正弘
SHOGAITO Masahiro

渡會 顯
WATARAI Akira

吉田 敏行
YOSHIDA Toshiyuki

編集後記

昨年3月の総会で、早稲田大学の福井文雅教授が本会会長を退かれ、代わって京都大学の興膳宏教授がその職に就かれることが決まった。

福井教授は、昭和58年に、榎木一雄、大地原豊両教授とともに本会を再建されて以来、会の運営に中心的役割を果たされ、榎木会長ご逝去の後には、会長として精力的に会を先導されてきた。行き届いた献身的な活動によって本会の今日の隆盛を築かれたご功績は、まことに大きいと思われる。ここにその労をねぎらい、心から感謝申し上げるとともに、今後も顧問として親しくご指導くださるよう、衷心よりお願い申し上げます。

代わって会長になられた興膳教授は、伝統ある中国文学科の担い手として、また文学部長として京大文学部を代表する学究であり、会長をお引き受けくださったことは本会にとってまことに慶ばしいことであった。

新しい試みとして、本年度の総会は、日本海側の名勝の地、鳥取で開催することになった。これは鳥取大学教育学部門田真知子教授のご好意によるもので、準備万端を整えてくださった同教授に厚くお礼申し上げます。講演は京都大学御牧克己教授が「禅の十牛図とチベットの牧象図」と題してお話くださることになっている。

また本文に記事を掲載したとおり、羽田正幹事のご紹介により、本会は10月に開催されるシンポジウム“Islam and Politics in Russia and Central Asia”を協賛することとなった。ご関心のある方の参加を請う。

日仏学者交換事業（招聘、派遣とも）の公募は、例年のとおり、4月末日で申し込みが締め切られる予定である。ご予約のある方は早めに中谷までお知らせいただきたい。

また渋沢クロード賞候補の出版物の推薦もお考えくださるよう。

本誌の編集は、本号より齋藤希史幹事と中谷英明が行うことになった。兩人とも昔取った杵柄のはずなのであるが、どうも軌道に乗るまでに時間がかかりそうである。諸氏のご協力とご寛恕を乞いたい。また中谷は興膳教授の後をうけ、代表幹事の責を担うことになった。こちらも不慣れのことで同様のことを乞うのみ。どうかよろしくお願い申し上げます。

なお会計は、引き続き森由利亜氏に担当願っている。会費の早期納入もどうかよろしく。

最後に、藤枝晃先生の訃報は、後進に大きな空虚の思いを齎した。先生は常に温容によって学生を包み込み、“写本学”とは何であるか、その繊細さと奥の深さを身をもって体現されつつお示し下さった。日仏東洋学界において、日本人学者はもとより、多数のフランス人学者にも尊敬と信頼と、そして厚い友情を勝ち取られた先生の存在は、例外的に大きかったと思う。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1999年3月5日

中谷英明

投稿規定

会員諸氏からの投稿を募ります。東洋学各分野の動向・消息などをお送りください。フロッピーでのご入稿のさいは、テキストファイルもしくはマイクロソフトワード書類でお願いいたします。打ち出し原稿の場合は、〔用紙：A4・本文：10p・行数：38行・二段組〕を目安にお願いいたします。

日仏東洋学会 通信 第23号

1999年3月28日

編集 日仏東洋学会

発行者 興膳 宏
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部 興膳宏研究室
TEL: 075-753-2808

発行所 〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518
神戸学院大学人文学部 中谷英明研究室

印刷所 六稜舎 〒530 大阪市北区浪花町 9-12-402
TEL: 06-6371-1681